

雷 電併入

名稱

雷ハ、イカヅチ、或ハカミト云ヒ、又字音ニテライト云フ、奈良朝以來、雷鳴ノ時ニハ、侍衛ノ官人必ズ宮中ニ祇候セシガ、後ニハ大雷三度ニ及ベバ、左右近衛ハ御在所ニ、左右兵衛ハ紫宸殿前ニ陣シ、内舍人ハ春興殿ノ西廂ニ立ツ、之ヲ雷鳴陣ト云フ、後世ハ唯藏人及ビ瀧口御壺ニ候シテ、鳴弦シ、御持僧念誦スルニ止マレリ、霹靂ハ、カミトケ、或ハカミトキト云フ、即チ落雷ナリ、落雷ノ爲ニ火災ヲ起シ、屋舎ヲ破ラレ、人畜ノ害セラル、コト屢ナリ、

電ハ、イナビカリ、イナヅルビ、或ハイナヅマト云フ、電光ナリ、

〔倭名類聚抄神靈〕雷公 兼名苑云、雷公一名雷師、方回反、和名伊加豆知、一云奈流加美。

〔箋注倭名類聚抄神靈〕按、雷公出淮南子、倣真訓、論衡雷虛篇及駁五經異義、引見禮記正義、雷師見

離騷經、

〔段注說文解字雨〕下、霤、易薄動生物者也、會本正、薄音博、迫也、陰陽、迫動、下各本有霤、雨二字、不辭、今依、謂回轉也、所以、从雨、畠、象回轉形、許書有畠、無畠、凡積三則爲衆、衆則盛、盛則必回轉、二月陽盛、雷發、回生萬物者也、

文雷、書字有畠聲者、皆當云、雷省聲也、魯、回切、十五部、凡古器多以回爲、雷、 屬籀文雷、間有回、當作畠、間有回、奪畠、 回雷聲也、說畠、間有回之意、 古文雷、雷、古

〔釋名釋天〕雷根也、如轉物有所根、雷之聲也、

〔類聚名義抄是〕遲、イナビカリ、遲、正、 〔同七〕雷、音偶、イカツチ、一云ナルカミ、 雷、正、 雷公イカ、雷師、同、

霹靂飾狄反、イカツチ、 霹靂辟歷、二音、カミオツ、一云カミトキ、

〔八雲御抄三上〕雷 なる ちはやぶると後撰によめり なべてはちはやぶるは神也 万十九

あまぐもを、ふろにふみあたし、なる神とは、あまぐもを、はれにいたしといふ心と、範兼説なり、

〔日本釋名天上〕雷 いかりてつちにおつる也